

1. 教育の責任

観光社会学を専門とする。コロナ禍を経験した私たちはアフターコロナにどのような未来を創るのか。観光の本質は変わらないが、常に観光は変化している。そして、観光には力がある。観光には、傷ついた地域と人々を癒し、和解させ、再生させる力がある。コロナ禍を経験したいまこそ、未来を考える人財を育成し、それに対応できる学生たちを社会に贈りだすことが責任だと考えている。

2. 教育の理念

本学の観光・地域マネジメントメジャーは真の観光人を育てることを目指している。それは必要不可欠なサービスに加えて、応用力のあるサービスができる人材の育成であり、それには、専門的な知識に加えて、幅広い社会に関する知識も必要となってくる。さらに、応用力のあるサービスには豊かな対人関係が築けるホスピタリティやコミュニケーション能力、そして社会のあらゆる主体のブリッジ役となれるコーディネート力も必要になってくる。ここから言えることは、結果的に真の観光人を育成するということは、どの業界にとっても必要とされる人材を育成することだということである。

3. 教育の方法

【目的と目標】

(教員としての目標)

現代社会学部の学びを、どのようにキャリア形成に発展させていくのかが、われわれ教員に課されている宿題であると認識している。

世界がつながったいまこそ、モノやサービスであっても、“日本のホンモノ”を世界に発信していくべき時代であると考えている。例えば、「ニッポン行きたい人応援団」(テレビ東京)の番組では、そこに登場する外国人は、日本の伝統産業や食に触れるといった観光をするだけでなく、日本でのホンモノ体験を自国に戻り、発信してくれている。また、サッカー元日本代表の中田英寿は、「にほん」の「ほんもの」をプロデュースしたものを、「にほんものストア」というオンラインストアとして、日本の逸品を世界に向けて発信している。

もう、観光は見て体験するだけの時代ではなく、観光にこそ、グローバル化の中で埋もれがちとなっている地域の宝物に光を当て、その価値を日本全国・海外市場に発信していく役割があると思っている。そこには、人と人との交流、そしてイノベーションが生まれ、結果として地域産業の再生や新たなビジネスの誕生、産業・経済の発展につながっていく。それこそがグローバル社会における、これからの日本の生きる道であり、そこに大手前大学 現代社会学部「観光・地域マネジメントコース」で学んだ学生たちが、その主役となれるように、学びをサポートする役割があると思っている。

(学生に求めること、期待)

それらを学び、発信する学生(大切な人財)はIT、情報技術のスキルに加え、英語はもちろんのこと、例えばまだ、ブルーオシャン市場であるインドネシア語などを身につけようとする挑戦こそが重要になると考えている。

そのような能力を身に付けた、彼らの活躍する舞台の広がりは無限となる。一方でビジネスの相手国の文化や嗜好を真摯に理解することも必要になってくる。つまり地域を丁寧に見ようとする姿勢と現地とのコミュニケーションが不可欠なのである。

それらを学んだうえで、日本人が得意とするホスピタリティを身につけ(これも日本の地域力と言える)、おもてなし(気遣い)のできるならば、世界中のどこにいても活躍できると信じている。その力をぜひ、修得してほしい。

【実践】

「観光・地域マネジメントコース」は、観光を勉強するだけではないという考えである。観光資源こそが、地域の魅力をつくっているという固有の考え方をもっていることから、地域での人びとの暮らし、また地域を基盤とする産業活動、地方自治体の施策などを考慮しながら観光というものを分析しようとしている。そこで、学生をまちづくりの現場に連れて行く授業を用意している。

コロナ禍で、観光業界は大きなダメージを受けたが、同時にこれまで以上に、「地元再発見」や「地域とのつながり」を考える機会を得た。改めて、コロナ禍を経験したわれわれは、地域を学ぶことでグローバルに広げることのできる視点を養い、社会に出て活躍してもらいたいという思いを強くしている。

地域価値を見直すことや地域を学ぶことは、地元志向の学生にとっては、必要不可欠なことではあるが、海外で活躍したい学生に

とても、非常に価値ある教育であると考えている。

4. 教育の成果

昨年、客室乗務員（CA）になった女子学生が誕生した。今年、ホスピタリティビジネスを学び、授業で学んだ「おもてなし精神」を自分の強みにして、世界のラグジュアリーホテルの代名詞でもある「アマンリゾート」に内定をもらった学生が誕生した。彼女は家族と初めて行ったハワイ旅行で、日本人が現地でサービス業を営んでいるのを眼にし、自分も観光ビジネスの経営者になるのもいいなと思って本学に入学したという。勉強するうちに、やはり一流のホテルで働き、一流のサービスを身につけたいと考えて、アマンリゾートを選んだそう。そのために、彼女は入学当初から好きな英語能力を高めるために授業を学修して、一流のサービスや言葉遣いを身につけるために、アルバイト先に、大阪梅田にあるインターコンチネンタルホテルを選んだ。そして、アルバイトをするなかで、自分のホスピタリティ能力を高めた。彼女は、自らの望む生き方を考え、その可能性を実現するための学びを学内外でも身に着ける努力をした。そして自分の好きなことや得意なことを仕事に選んだ。ホテル以外にもたくさんの会社に挑戦し、内定を獲得し、いまは、東京に出て自分を試したいと考えている。

ラグジュアリーホテルと言えば、2025年の大阪・関西万博の開催を控え、関西のみならず、全国で多くのラグジュアリーホテルの開業が急がれている。これまで関西では、リッツカールトンホテルが最高級とされてきたが、現在、コロナ禍であっても、「富裕層向け」の外資系高級ホテルチェーンや日本の星野リゾートは積極的な開業を進めている。これに応じるように、来年開業する外資系ラグジュアリーホテルや星野リゾートに内定をもらった学生もいる。昨年までは、コロナ禍により多くの会社が採用を控えていたが、アフターコロナを見据えて、企業も積極的に採用へ動き出していることがわかる。

さらに注目に値するのが、本学と提携している海外の大学へ、一年間または半年間の中・長期留学に出発した逞しい学生や、また、中国の大学の授業にオンラインで参加しながら長期留学の出発を控えている学生も出てきた。コロナ禍を経たいま、このように海外を視野に入れる学生も多くなってきているように思われる。彼らは2年・3年後の社会をしっかりと見据えて、自分の将来を考えている。

みなさんにも、自ら考え行動する力を身に付けてもらいたい。

5. 改善への努力と今後の目標

私の使命は、彼らに続くような学生を、しっかりと社会に送り（贈り）出すことだと思っている。

星野リゾートの星野佳路代表は、「コロナ禍により、観光のあり方が、どこか本質に変わってしまうのではないかと懸念されているようだが、旅行市場の本質的な部分は全く変わらない、ほぼすべてが、「コロナ前」に戻ると考えている。旅行市場は完全に復活し、むしろ、ワーケーションやテレワークといった動きが、今後もプラスの要素として加わってくる」とまで語っている。上述のとおり、彼はコロナ禍のなかでも、積極的にホテルの開業を展開している。

学生にはすべてが元通りになると（ミスリード）誤解させるのではなく、長期的な展望もみながら、3年後、5年後の社会を想像して、しっかりといま何を準備すべきかを考えるようにリードしてゆきたい。インバウンド市場も、円安も重なって、順調に戻ってきている。2025年の大阪万博には活況呈してほしい。

前述の通り、大阪や京都はもちろん、日本全国でラグジュアリーホテルの開業が続いている。そこには、世界の富裕層を相手にホスピタリティを身に着け、洗練された“おもてなし”を実践し、活躍している本学の学生が国際文化都市の京都・大阪・神戸で活躍している。いや、東京、横浜かもしれない。そして、近い将来には、海外で活躍している学生も珍しくない。

そのように想像しワクワクしている。

【添付資料】